
編集後記

なんとこの夏の暑かったことか！そして9月の声を聞いてもなお暑い毎日、地球が狂ってきてしまったとしか言いようがない。しかし本当に狂ってきてしまったのは日本の医療行政、透析医療。今判で押したように4,000点ダウンのレセプトを前に、このたびの改定のすさまじさ、世界に誇ってきた日本の透析医療の後退を頭ではなく実感している。“武士は喰わねど高楊枝”意地でも質を落とさないで（質を上げるところまで行かないまでも）透析をして行ける可能性なんてあるのであろうか？ 合理化や工夫ではもう不可能。合併症や高齢、痴呆で信じられないぐらい手の掛かる患者さんが多くなっている中、患者数があればなんとかなるという問題でもない。移植が減り、際限なく増える透析患者。一兆円枠を越えないという大原則を振りかざすならば2年後の引き下げも容易に想像される。設備投資など夢のまた夢。国が貧乏になると間違いなく医療、福祉が切り捨てられるのは世の常。あの“ゆりかごから墓場まで”の福祉大国と言われたイギリスで、透析の保険適応を65歳までと決めた時代があった。お隣の国から透析の回数制限があるのでCAPDをしてほしいと言われたこともある。私が医者になった頃、わが国でもお金の切れ目が命の切れ目と言われ、透析中止など悲惨な事例が多く存在した。患者さんたちの命がけの運動で透析医療の公費負担が実現し、日本の透析は世界一と自他とも認め、このレベルは揺るぎないものと信じて疑わなかった日本の透析医療も、短時間透析、透析中止や導入年齢、透析非導入がとり沙汰される昨今である。来年から健保本人の3割負担が始まる。透析患者の透析医療以外の自己負担が始まるのも遠い話ではあるまい。透析医療の質も国の方針であつという間に低下するのだという恐ろしさを強く強く感じている。今だからこそ日本透析医会の存在が問われるときだと思う。

書くことが大の苦手、加えて期日にならないと頭が回転しない（したがって期日に間に合ったことがない）厄介な性格の私が一番ミスマッチの広報委員になっているのは不思議でかつ心苦しいことである。しかしこの日本透析医会雑誌は本当に格調高い雑誌になってきたと、これだけは片隅に名前を置いてもらっている人間として大威張りしている。会員の皆様どんどん投稿して下さい。

広報委員会委員 坂井 瑠実